

[A年] 公現後第3主日(2021年1月24日)

【旧約聖書日課】 イザヤ書8章23節～9章3節

8²³今、苦悩の中にある人々には
逃れるすべがない。

先に
ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが
後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた
異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。

9¹闇の中を歩む民は、大いなる光を見
死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。

2 あなたは深い喜びと
大きな楽しみをお与えになり
人々は御前に喜び祝った。
刈り入れの時を祝うように
戦利品を分け合って楽しむように。

3 彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を
あなたはミディアンの目のように
折ってくださった。

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

イザヤ書8章23節～9章3節

8²³しかし、抑圧された地から闇は消える。

先に、ゼブルンの地とナフタリの地は
辱められたが
後には、海沿いの道、ヨルダン川の向こう
異邦人のガリラヤに栄光が与えられる。

9¹闇の中を歩んでいた民は大いなる光を見た。

死の陰の地に住んでいた者たちの上に
光が輝いた。

2 あなたはその国民を増やし
その喜びを大きくされた。
彼らはあなたの前に喜んだ。
収穫を喜ぶように
戦利品を分けて喜び踊るように。

3 彼らの負う軛、その肩の杖、虐げる者の鞭を
あなたがミデヤンの目のように
打ち砕いてくださった。

(新共同訳)

【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙1章8～17節

8まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。9わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださることですが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、10何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。11あなたがたにぜひ会いたいのは、「霊」の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。12あなたがたのところ、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです。13兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。14わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

16わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ローマの信徒への手紙1章8～17節

8初めに、私は、イエス・キリストを通して、あなたがた一同について私の神に感謝します。あなたがたの信仰が世界中に語り伝えられているからです。9私が御子の福音を宣べ伝えながら心から仕えている神が証ししてくださるのですが、私は、あなたがたのことを絶えず思い起こし、10祈るときにはいつも、神の御心によって、あなたがたのところに行く道が開かれるようにと願っています。11あなたがたに会いたいと切に望むのは、霊の賜物をあなたがたに幾らかでも分け与えて、カづけたいからです。12というよりも、あなたがたのところへ、お互いに持っている信仰によって、共に励まし合いたいのです。13きょうだいたち、ぜひ知っておいてほしい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも、何か実りを得たいと望んで、何度もそちらに行こうとしたのですが、今まで妨げられているのです。14私には、ギリシア人にも未開の人〔=バルバロイ〕にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

16私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力です。17神の義が、福音の内に、真実により信仰へと啓示されているからです〔別訳→揭示され、信仰から信仰へと至らせるからです〕。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

(新共同訳)

【福音書日課】 マタイによる福音書4章12～17節

12イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。13そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。14それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

15「ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、

16 闇闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

17そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マタイによる福音書4章12～17節

12イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。13そして、ナザレを去って、ゼブルンとナフタリとの地方〔別訳→塚〕にある湖畔〔直訳→海辺〕の町カファルナウムに来て住まわれた。14こうして、預言者イザヤを通して言われていたことが実現したのである。

15「ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿い〔直訳→海沿い〕の道、ヨルダン川の向こう

異邦人のガリラヤ

16 闇の中に住む民は

大いなる光を見た。

死の地、死の影に住む人々に

光が昇った。」

17その時から、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・1月24日「公現後第3主日(降誕節第5主日)」の日課主題は「宣教の開始」。

・主イエスの「公生涯」は「洗礼」から始まり受難・十字架に終わるものとして語られるが、そのほとんどの場面で「弟子」が傍らにいたことが前提とされている。しかしながら、「洗礼」と「荒野の誘惑」、そして最後の「十字架刑」については、弟子たちの「不在」が明に暗に描かれる。「宣教の開始」は、共観福音書では「弟子の召し」に先立って、「洗礼者ヨハネの逮捕」が契機となって始められたこととして描かれるが、マタイ福音書およびマルコ福音書は、両者をほぼ同時のこととして語るのに対して、ルカ福音書は、主イエスが単独で「宣教活動」をされていた時期を明確に描いた後に「弟子の召し」を描いている。事実としては、主イエスの「公生涯」を伝え語った弟子たちが実際に直接知り得た主イエスの出来事は「弟子の召し」以降のことであるから、たとえ主イエスが単独で宣教活動をされていた時期があったとしても、そのことを詳細に伝え語ることができなかつただろう。ルカ福音書は、降誕物語も含めて主イエスの物語を、さまざまな関係者の証言を整理して編集したものとして断っており(ルカ1:3)、マタイ福音書やマルコ福音書の前提とするような「弟子自身の見聞きしたことの証言」という枠組みに必ずしも縛られていない。

旧約日課(イザヤ 8~9 章より)

・「イザヤ書」は、旧約正典の最初に確立した「律法と預言者」の枠組み形成において要として位置づけられたと考えられる預言書で、前8世紀の北王国滅亡期に南王国宮廷で仕えた祭司イザヤの預言活動の継承を軸に、北王国における預言者らの預言の伝統をも包含しつつ、「預言者の伝統」を継承する集団らによって、継承集団の預言活動も一体のものとして前6世紀までに編纂された預言書。前8世紀の預言者イザヤの預言(おそらく当初から「預言者イザヤの書」のようなものとして編纂されていた)をもとにした前半(1~39章=「第一イザヤ」と、継承集団が前6世紀のバビロン捕囚期から解放期・ユダヤ帰還時代に行った預言活動を中心とした後半(40章以下=「第二イザヤ」)に分けられる。

・「第一イザヤ」は、冒頭に記された時代(ユダの王、ウジヤ〜ヒゼキヤの治世)の歴史的出来事に対応する形で預言活動がまとめられている。ウジヤ王(在位=前783~742年頃)は50年以上の治世で安定した時代を南王国にもたらした王であったが、この時代は北王国もイェフ王朝ヤロブアム王(在位=前786~746年頃)によって経済的政治的に安定した豊かな時代を謳歌していた。その時代は、東方のバビロンおよびアッシリアの覇権が拮抗し、周辺諸国は比較的影響を受けずに独立を保つことができたとされ、

南北両王国の安定と繁栄は、外的な要因によってもたらされていたといえることができる。ところが、前744年頃、アッシリアでティグラト・ピレセル王が即位すると、彼のもとでアッシリアの覇権が拡大しバビロンは没落、アッシリアは周辺諸国を軍力をもって支配するようになった。イザヤは、そのような世界史的に大きな変化の波に飲み込まれ始めた南王国ユダで、王の側近として仕える祭司の立場で助言(預言!)を告げたのである。

・イザヤは、ウジヤ王の孫・アハズ王の外交方針(アラム王国と北王国の同盟に参画せずに、アッシリアに服することでアラムおよび北王国を排除する)を批判し、アラム・イスラエル同盟(シリア・エフライム同盟)からもアッシリアからも距離を置いて神の助けに信頼した自主独立を貫くように助言し、神の助けの「しるし」として王国の王位継承者が絶えることなく与えられるという「インマヌエル預言」を告げていた(7章)。日課箇所は、それに基づいてアハズ王の後継・ヒゼキヤが幼少でありながら王として即位した折に告げられた「祭司による即位宣言」の一部であると解釈される箇所である。ヒゼキヤ王(在位=前715~687年頃)即位の時、北王国はすでにアッシリアによって滅ぼされていた(サマリア陥落=前722年頃)。その北王国領域の喪失が、日課箇所でも挙げられる地名によって示されていることである。ゼブルン、ナフタリは十二部族の名として知られ、ガリラヤはそれに含まれない名であるが、領域的にはほぼ重なり合う地域で、地中海沿いのフェニキアとも隣接する。これらの地域は、歴史的にはカナン定住時代の当初からではなく緩やかに「イスラエル」の枠組みの中に組み込まれていったと考えられ、イザヤも、この地域に「ガリラヤ」というイスラエルの枠組みに参画していない「異邦人」が存在していることを認めている。

使徒書日課(ローマ 1 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロの未訪の地であるローマの教会に宛てて、自らの訪問計画を伝えると共に、その後のエスパニア(異邦人)伝道計画に協力してもらうことを願って、その計画の神学的基礎づけを示して理解を得ることを目的に執筆されている。日課箇所は、書簡冒頭の挨拶を終え本論を始めるにあたって、これから述べようとする趣旨を告げている部分である。

・当時の帝国首都であるローマ市の人口は100万人に達していたとされるが、研究者の推定では、そのうちの約10パーセントがユダヤ人であったのではないとも言われるほど、ユダヤ人コミュニティが大きく発展していた。キリスト教会は、紀元2世紀にはいるまでユダヤ人コミュニティを足掛かりにして拡大しているが、ローマ市においても、使徒らの積極的な関与が為される以前からキリスト者の共同体ネットワークが形成されていたと考えられる。伝承では、使徒ペトロも使徒

パウロもネロ皇帝の時代に起きたキリスト者弾圧(後64年)の際にローマで殉教したとされるが、その頃にはすでにユダヤ教と区別されうるようなキリスト信者集団が認知されるほどの規模となっていたのである。

・日課箇所では、13~15節など、書簡の受取人であるローマ教会の人びとが皆「異邦人」であるかのような書きぶりであるが、本書簡の末尾(16章)に付されたリストによれば、ローマ教会はユダヤ人と異邦人の混成教会であったことが分かる(もともと、16章を別の書簡からの転用だとする研究者のいる)。パウロは、「異邦人の使徒」を自認しているが、実際には、彼が開拓創設した教会が純粋に異邦人のみの教会であったことはなく、「ユダヤ人が初穂となって異邦人を積極的に受け入れる教会」を各地に創設した。その意味では、ローマ教会がすでに「ユダヤ人を基礎として異邦人を受け入れる教会」であったことをもって、パウロは「異邦人の教会」のような呼びかけ方をしているのであろう。実際、本書簡の論旨は、ユダヤ人と異邦人の区別を出発点としながら、最終的にはどちらに対しても根源的に一つの神の救いの計画が働いているということを示すことにあるのである(11章参照)。

福音書日課(マタイ4章より)

・日課箇所は、共観福音書が共通して描く主イエスの宣教開始を伝える記事で、「洗礼」「荒野の誘惑」の出来事の後に生まれ育った「ナザレ」のある「ガリラヤ地方」に戻られて、そこで宣教活動を開始したと物語られる。

・ここで伝えられる宣教の言葉(17節)は、マルコ福音書でも同様の言葉が伝えられている(マルコ 1:15)いるが、ルカ福音書では伝えていない。ルカ福音書は、主イエスが「神の国の福音を宣教」(ルカ 4:43)されていたことは伝えているので、主イエスの宣教内容についての理解に差異はないと考えられる。マタイ福音書は、この宣教の言葉が洗礼者ヨハネの宣教の言葉とまったく同じであったとしており(マタイ 3:2)、主イエスが洗礼者ヨハネの宣教を継承する者であったということを明確に示そうとしている。それに対して、ルカ福音書は、両者の宣教の連続性を否定しないまでも明示することを控えているのかもしれない。ルカ福音書は、マタイ・マルコ両福音書が主イエスの宣教開始を「ヨハネが捕らえられた後」と明示していることも省き、洗礼者ヨハネと主イエスとの関係性を異なる視点で理解しようとしている。

・この宣教の言葉に見られるように、マルコ福音書やルカ福音書で「神の国」とされる部分がマタイ福音書では「天の国」に置き換えられている例は、少なくない。マタイ福音書にも「神の国」の用例はあるが(6:33、12:28、19:24、21:31,43)、逆に「天の国」の用例はマタイ福音書にしかない。「天」は、当時のユダヤ教ラビ⇔「律法学者(グランマテュース)」が「神」を表すのに好んで用いた婉曲表現であることが知られており、

本福音書が「学者(グランマテュース)」(13:52)の伝統を継承した者によって執筆されたことによるものではないかと推測されている。

・14~16節は、イザヤ書 8:23~9:1を典拠とした預言成就の記述であるが、引用は必ずしも逐語的ではなく、イザヤ書が踏まえている史実(アッシリアによる北王国の占領・支配)を示唆する表現が除かれており、恣意的な適用をしていることがわかる。ただし、ここで主イエスが宣教の拠点と定められたという「湖畔の町カファルナウム」は、シリア地方への入口にあたり、ローマ軍も駐留する地であったという意味では、イザヤの預言の時代同様に「異邦人の支配下」にある地であった。福音書記者は、ローマ帝国当局の手前、穏健な表現にするために引用を略したのかもしれない。

来週の誕生日(1月24日~30日)

。

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-4番「世にあるかぎりの」(= I 62)は、C.ウェスレー(18世紀英国)の代表的な讃美歌で、彼が自身の回心経験を記念して作詞した。メソジスト歌集のみならず多くの教派歌集で採用されている。曲は、19世紀初めにドイツで活躍した音楽家 C.G.グレーザーの曲を19世紀米国の教会音楽家 L.メーソンが編曲したもの。1954年版の曲は日本版独自のもの。
- ・こどもさんびか-109番「ロケットにのって」は、『こどもさんびか2』(1983年版)編纂にあたって新しく創作されたもので、作詞は 20世紀を代表するクリスチャン作家・阪田寛夫。作曲は、大中恩、中田喜直らとともに新しいこどもの歌を創作する活動グループ「ろばの会」を結成した合唱指揮者・磯部倅のよる。
- ・21-412番「昔、主イエスの」(= I 234)は、20世紀日本を代表する讃美歌学者で牧師の由木康が1931年版『讃美歌』編纂時に、社会的視点を持った讃美歌を補うために作詞。

21-4「世にあるかぎりの」

O for a thousand tongues to sing

1. Oh, for a thousand tongues to sing / My great Redeemer's praise, / The glories of my God and King, / The triumphs of his grace!
2. My gracious Master and my God, / Assist me to proclaim, / To spread through all the earth abroad, / The honors of your name.
3. The name of Jesus calms our fears / And bids our sorrows cease. / 'Tis music in the sinners ears; / 'Tis life and health and peace.
4. He breaks the pow'r of canceled sin; / He sets the pris'n'ner free. / His blood can make the foulest clean; / His blood avails for me.
5. See all your sins on Jesus laid; / The Lamb of God was slain. / His life was once an offering made / That you might live again.
6. Glory to God and praise and love / Be ever, ever giv'n / By saints below and saints above, / The Church in earth and heav'n.